里山ハイキングへの招待

本会顧問　古川　章

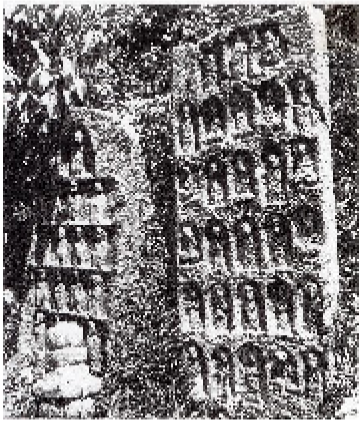
　普賢寺川に沿って西へ、曲折の山道をさかのぼる。やがて、「打田」という集落である。
道の両側には、ひなびた民家が並ぶ。この集落のほぼ中央に、「西明寺」というお寺がある。隣接する須賀神社の境内続きと思われるような位置にある。一説には、神仏合体のなごりかこの神社の神宮寺ともいわれている。この寺の歴史を聞くと廃仏毀釈によって本堂は取り壊され、仏像や仏画を焼き払うという乱行もあったとか。訪れる人もまれな古寺への石段を上がると、境内は狭い庭である。すぐ左脇の土塀の前に五輪の石塔がある。高さ約１．５メートルの花崗岩づくりで、南北朝初期の作と伝える。これは南朝の忠臣千葉左衛門という人の墓とする説がある。本堂には室町期の阿弥陀坐像が安置されている。
この寺の原大演住職は、里子の愛育に力を尽くした人である。「田辺音頭」に唄われる「里子育てる打田の里は、田畑打っても子打たぬ」とあるように、この里が「里子村」として知られるその歴史は、奈良あるいは平安の時代にまでさかのぼるほどの長い歳月であると古老はいう。現代の児童福祉の面で先駆というべき制度がここには古くから育っていたのである。もっともいまではこの制度も衰微してはいるがー。
　このあたり須賀神社は、打田でも高台である。公民館があり、100 年にわたる分校の歴史を 49 年に閉じた普賢寺小学校の元打田分校が老朽のまま残っている。田辺唯一の分校史は、明治 7 年 3 月にさかのぼるという。この分校には、地元打田と隣の高船の児童 1 年と 2 年が学んでいたのである。今ここに田辺の古民具を収めて、民具館としてよみがえらそうとの動きがあるときく。またこの分校の校庭の片隅には珍しい一つの碑が建っている．ここの出身で、屯田兵として北海道に渡り、開拓に情熱を燃やした 1 人の男を記念する高さ 3 メートルの生駒石の碑である。その人の名は加藤鉄造さんといって、あの有名な隼戦闘機隊長の加藤建夫少将の実父の顕彰碑なのである。

この打田から、さらに奥の「高船」へ向かう。人っ子一人出会わない牧歌風景の中をしばらく行かねばならない。たんぽぽ、すみれ、あざみ、岩梨、イタドリ、茶の花、りんどう、あけびなど四季折々の草花やつくし、わらび、ぜんまいなどの山菜に満ちあふれる、静かで明るい野の道なのである。
乳牛がのどかに遊んでいたり、5 月だったら今も田を鋤いている牛に出会ったりするなつかしいふるさとの道でもある。やがて「高船」という集落を目前にして、はじめてここを訪れた人なら驚きの声をあげることだろう。南に面した山腹を這うように頂上まで、野山里の民家のすべてが姿を現し立ち上がっているのである。ここでは、極楽寺と笠上神社を訪ねたい。極楽寺は天正年間（1573－91）の開創になる寺である。ここにある御影石でつくられた２基の五重塔を石造美術として鑑賞したい。その１つは、はじめ七重塔であったが、五重塔になっており軸部の四面には仏像が刻まれて、もう１つは、軸部に梵字が残っている、鎌倉後期の層塔である。ほかのもう１つは尖頭形の石塔卒塔婆であり表面上部に梵字のある鎌倉期の作でこれは境内の隅にある。

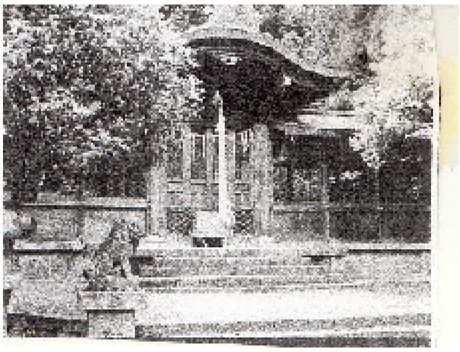
　近くの石船神社には、饒速日命（にぎはやひのみこと）の天の石船に乗っておりられたという巨石伝説を伝える船石が草の中に埋もれてあった。そうした奇想天外な古代伝説に思いをはせながら、高船でも最も高地にある、笠上神社にのぼる。この神社は、またの名を瘡（かさ）神社ともいい、祭神を豊受比売命（とようけひめのみこと）とする疱瘡の平癒を祈願する信仰を持つ神社である。桜や紅葉の古木が沢山ある。ここからは、眼下に木津川が見え、山城町や木津町などの山城平野、遠奈良市一帯が一望のもとにおさめることができる景勝の地。

　さらにまたこの「高船」から「天王」へと山道をくだる。天王では、茶筅作りの名人、久保左次郎さんをたずね、竹が生きて躍動しているような、鮮やかな指さばきに感嘆の声を上げる。そしてまた、

辻尾家の大牡丹園の百花りょうらんに酔うという優雅なコースを重ねた。その一生を茶筅作りにささげる久保さんは、京都府下ではただ１人の名人芸とも言える茶筅師である。最も茶筅は、生駒市高山が日本の主産地であり、久保さんもその生駒で久保豊前守を名乗った名家の出、第７代目にあたるという。茶筅によって竹の持つ美しさは一段とその繊細さを示し、光の中に見せる竹の光沢は、静　そのものである。まさに茶筅こそ竹の華といえる芸術だろうと私は思う。



久保さんのお家の近くに、天王の惣墓がある。ここの入り口に、珍しい石仏群がある。「十六尊石仏」と「三十尊石仏」である。桃山時代の天正１８
年（１５９８）６月３日の銘がはっきり残っている。
中でも十六尊出来物は、厚肉彫りで、地蔵菩薩や阿弥陀像が摩滅している部分もあるが、表情のよく残っているのもある。いずれも仏の來迎をあらわしたものである。ここから辻尾家の牡丹園はすぐである。牡丹やツツジ、サツキ、山桜、チューリップ、パンジー、イチハツなどの草花に彩られた無二荘は見上げるような石垣の高台にある。
　さわやかな五月若葉の風は、牡丹の香をはこんでくる。９０歳で亡くなられた当主の辻尾和三郎翁が明治３７年頃から先代のあとをついで努力を重ねられ、約３０種、２０００株の牡丹園に完成されたのである。翁亡き後、令孫の仁郎氏が受け継いでおられる。ここは、宣伝されないせいと、この高燥な土地柄、空気が清澄であるため、花の色の鮮麗さを誰もが推奨される。文人雅客が多いため丘上には、俳人桂樟渓子の「雲上に山荘の牡丹あふれん」との句碑が建っている．雲上とはまさにいい得ている。



またこの天王には、朱智神社いう古社がある。閑静な高ケ峰の森に抱かれた延喜式内社である。この「朱智」の起こりは、神功皇后の祖父にあたる迦爾米雷王（かにめいかづちのみこ）のことを朱智王ともいったことによるという。神社は、仁徳天王の御代に創立されたと伝えるが、桃山時代に再建。ここに安置されている藤原時代後期の午頭天王立像に注目したい。木彫りで彩色を施した高さ１４２センチの神像である。昔から、毛の物の守り神として知られ牛馬を連れて参詣する人が多かったという。さらにまたここには、毎年７月１４日に祇園祭という例祭が行われる。貞観時代から伝わる
「榊還（さかきうつし）」の神事があったが復活していない。京都の祇園祭の鉾はここの榊を受けて出御したと伝えるほどの由緒あるものである。　平常は、この社を訪れる人もまれなれば、参道の石段にしても、苔むした石灯籠にしてもそのひなびた野趣味は、かえって鬼気さえ感じさせるほどせまってくるように私には感じられた。